
黒き舞姫

天狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒き舞姫

【Nコード】

N7632J

【作者名】

天狐

【あらすじ】

一族総出の結婚式。

それによってひとりの運命は変わってしまう。見た目は少女、中身は男。現実を軽く否定しながらがんばってます。

プロローグ（前書き）

『あかいいれい』の方が完成間近で何故か2000字以降が消え去って精神的ダメージが抜けません。

ダメージが抜けて再度やる気が起きるまでこっちに集中しようと思います。

あとがきの方で主人公の設定を載せておきます

ブローグ

俺はいつたいどうなったのだろうか

とりあえず記憶を整理してみるとしよう

裏社会じゃ名の通ってる剣術の一族総出で息子の結婚祝いをしていたふと馬鹿が孫を連れて旅に出て今日帰ってくる筈なのにいないことに気づいて搜索する

いくら探しても見つからずにいるとき賭けに負け金をなくしたから青森から歩いて帰ってくると連絡がくる

間に合わないことを知りイラつきながら妻の元へいく途中光に飲まれ、気づいたら森の中にいた

その上外見は5歳程度の女の子だった

相棒の調べでは見た目相応の年齢だそうだがそれ以外は停止状態だそうだ

つまり見た目に合わない筋力（成人男性を投げ飛ばせる程度）を持ち、それは肉体が元の体と同年齢になるまで変化しない

利点は筋力維持の必要なし

問題点は筋力が伸びることはない

まあそれはどうでもいい

とりあえず行動しないと

愛刀と相棒を持ってふらつこうとするが、自身が全裸なことに気付く
結婚式に着ていたものがあつたので、シャツを着ることで素肌を隠
すことにする

ブカブカでずれそうだが、無いよりマシだろう

そのまま山頂に向かって登って数分後、見事にぶっ倒れていた

原因はこの身体になってから何も口にしていないことによる飢えと
乾き

血と悪意にまみれた人生だったけど、このまま終わっても後悔する
ように生きてはいない

俺はそのままゆっくり意識を落とした

夢を見ていた

それはいろいろな場所を巡っていた頃の話

とある人物に依頼され俺は二つのものを作った

それは対となるもので友情の証として一つはその人に

もう一つは俺が賜り、現相棒となった

いつかどちらかが乱心したときに破壊されること願って

「ん……ここは、どこ？」

誰かに拾われたようで布団に寝かされていた

起きたことを察知したのか、誰かがこの部屋にやって来る

ドアを開けて入ってきたのは、男の子だった

孫が成長すればこんな感じかなと思いつつ見ていると彼は安心したように表情を和らげる

「気がついたみたいだね。僕の名前は高町 恭也だ。君は？」

名前、ねえ……

本名では男らしいため読みを変える

「千秋。^{ちあき} 神威 千秋」

名字は頭に浮かんだものを口にした

まあ、ちょっと変かもしれないが気にしない

恭也くんも気にしていないようなのでこちらから問わせてもらおうか

「ここは？」

「僕の家だ。君は森の中で倒れてたんだ」

知ってます

記憶が軽くなっていると思われてるようだが気にしない

「どうして？」

「父さんが連れてきたけど、たぶん助けたかったからだと思う」

いい人のようだ

ちなみに警戒はしてないけど口調は最低限にしてる

うっかりへんなこと口にしないようにするためだ

そのあといくつか質問をしたあと、また誰かがやってくる

ドアを開け入ってきた人物を見て、何も言えなくなった

「お腹が空いてるだろうからお粥を持ってきたけど、食べれるかな」

空腹感には確かにあったが、欲求は全て飛んでいった

ジツときた人物を見ていたら、微笑みを浮かべられた

「俺は高町 士郎。恭也の父親だ。君の名前は？」

「ふ——神威 千秋」

あぶなかった

危うく本名名乗りかけた

とりあえずお粥を食べることにする

「食べながらでいいから、質問に答えてもらえるかな」

士郎が聞いてくることはわかってる

だから頷いた

「あの刀、伏龍と鳳雛って言うんだが、どこで手に入れたのか教えてもらえないかな」

「アレは……形見。大切な人から貰った」

俺の愛刀だから気になるわな

士郎は納得したあととにかく決意した顔でこちらを見る

しかし俺はお粥を食べ続ける

「千秋ちゃん、うちの子にならないか」

「いや」

一応即答しておく

いろいろと理由はあるけど、今はお粥を食べることに専念する

これ美味しいからさ

「即答しなくても……」

「父さん、急に言われたら嫌がられるのは当たり前だろう」

拒絶されてへこむ親にあきれかえる恭也

食し終えて余裕のできた頭で考える

戸籍とか、いろいろと問題が多いな

気乗りしないが、養ってもらおうとしよう

「冗談。いいよ」

「そうか。これからよろしく」

士郎は笑いかけてきた

我が妻美影へ

俺、不破 千秋は息子^{せんしゅう}の子、つまり自分の孫の高町 千秋として今

後生きていくことになった

きつと死んでるだろうから、天国？で見守っていてくれ

プロローグ（後書き）

高町 千秋 （たかまち ちあき）

長い黒髪と翡翠色の瞳の少女

なのはが生まれる一ヶ月前に高町家の養子になった

本名は不破^{ふわ} 千秋^{せんしゅう}と言い、士郎の実父

クロノと同年齢だが落ち着き払っている（クロノに裸を見られても動じないなど）

自他共に認める『体より頭を働かせるタイプ』で作成に関しては何であらうと凄腕

だが、永全不動八門一派 御神不破流の皆伝者なので、『陸戦ならAAAランクくらいの戦闘力はある』と自称

女性体に馴れたのか、口調も女らしくなったが感情が高ぶると男っぽく戻る

第1話（前書き）

なのはを出すつもりだったのに出てこない・・・

第1話

あれから九年もたった

私が高町家にご厄介になって一ヶ月で妹が生まれた

名前はなのは

士郎は菜之葉とつけようとしたらしいけど、私と母、桃子さんによつて一蹴されひらがなになった

その年の内に私自身の口調も女性らしくなった

まあ、大人びてるらしいけど

高町家に幸せが満ちていたけど、なのはが物心ついたくらいの頃に崩れてしまった

士郎が爆弾により重体になってしまった

みんな取り乱したけど、恭也が一番ひどかった

この面子で一番爆弾の作る惨劇を理解してるからね

私？驚いて、まあ落ち着いたかな

中身は50くらいだから達観してしまっているんだと思う

その日から、恭也は変わった

『強くならなきゃ』と言って学業を疎かにして剣を振る毎日

重体の士郎を見ても涙を見せなかった桃子さんがそれを見て涙を見せながら止めようとする

それでも止まらない恭也に危機感を感じた私は行動を起こした

夜中に士郎のもとまで忍び込み、魔法で回復させる

流石に一日で完全治癒は不自然なので少しずつだが

その間恭也には眠ってもらった

あの程度の若造にバレるような気配の絶ち方はしてない

結局士郎が目覚めるのに一ヶ月かった

意識が戻った士郎曰わく「幽体離脱してた」らしく全て見てたらしい

おかげで魔法が使えること、ついでに千秋せんしゅうのことも話すことになった

ちなみになのはには伝えてない

あの子は魔力持ちだから知るべきではないと考えたから

その後退院した士郎は護衛業を辞め、桃子さんの店『喫茶 翠屋』で働くようになった

恭也も落ち着きを取り戻し身体検査を受けてくれた

結果は故障寸前だったらしく、しばらく安静を命じられ士郎に叱られた

本人は十二分に反省していたから二度とこんな真似はしないだろう

この頃から私は髪を伸ばした

そして現在、学生生活を楽しみつつ感覚を鈍らせない程度に鍛練をして第二の人生を楽しんでいた

「千秋、ゲーセン行こうよ」

「またなの？いい加減面倒なんだけど」

毎日のように私を誘ってくる友人の村上 由里香

暇つぶしに格ゲーをやっていた私に乱入し負かした以来の仲だ

「今日こそダメージを与えて見せる！」

「そこは勝ってみせるでしょ」

由里香の目的は『ダメージを与えること』

ただそれだけで連コインしまくり、周りに迷惑をかける

はつきり言つて私が恥ずかしいので止めてもらいたい

「パーフェクトゲームで負けたのにいきなり勝てるなんて言つのはバカらしいじゃん。だから一步前進を目指してるんだ」

「その考えは素晴らしいけど、こっちの事情つてのも考えなさい」
これで成績はトップクラス、彼氏もいるとのことだ

彼氏さん、あなたとの時間が私のせいで削られてるような気がしてなりません

たまにはどこかに連れて行ってあげてください

「ん、なんか用事？」

「誘う前にそれを聞きなさい。
今日は機械工学を学びにね」

「人生に一度しかない青春をそんなコトに使うなんて……」

「信じられないとも言いたそうな顔だけど、私はそれでいいと思つてるの。男性に興味ないから」

やりたいようにやるが私の方針だから青春とやらも趣味に費えても
らう

それに対して由里香は納得していた

「二年になってからも十人だっけ。あんたにフラれたの」

「昨日で+1。アッチのことも考えて名前は言わないけど、いつも
のように髪の毛と顔を褒めてた」

「いい加減その情報出回らないのかな。今までの80人全員がそれ
でフラれてるのに」

「自分と同じ目に遭えばいいって考えがあるのかもね」

コンプレックスではないけど、私は自分の顔に良い印象はない

美形ではあるらしいけど、感情が入り混じるので複雑だ

そろそろこのことを周りに明けようかと思うけど、別の褒め言葉に
なり断りの言葉を考えるのがいやなので諦めている

話に区切りがついたので、下校しようと立ち上がる

由里香も当たり前のようにわたしについて下校する

「そついやさ。もう新曲出さないの」

「いつも言ってるでしょう。あれはティオレさんに嵌められて歌わされてるって。私としては、目立ちたくない」

「諦めなつて『虹の歌姫』さん」

「次言ったら臍を蹴るわよ」

「地味に酷い脅迫に泣きたい。私はこんなにも愛してるのに！」

「わかったから。そしてその台詞は彼氏に言いなさい」

虹の歌姫は私の通り名である

過去に七曲も嵌められて出しているのだが、統一性が全くない

それら全てを（ティオレさんが言うには）完璧に歌ったが故についてしまったもの

顔出しはしてないためバレることはないと思っていたが、由里香に気付かれ大声で言われ露見した

今は鎮圧（あくまで鎮静ではない）したが、当時は毎日サインを求められたり（全て断ったが）、誰かがリークしたらしく記者がやって来たり（気配消すなどでやり過ごした）大変だった

「今でもあの件は根に持ってるんだから」

「悪かったって。みんながあそこまで騒ぐなんて思わなかったんだよ」

「少し考えればすぐにわかるわよ。後先考えずに行動するのは控えなさい。直ってないんでしょ、その癖」

「コレが直ったら私じゃない」

想像できないから見てみたい

げた箱で靴に履き替えたら、誰かからメールがくる

見てみると、恭也からで用件は美沙斗の迎えに行ってもらいたいとのこと

「……予定が大狂いよ」

「学園内で携帯の使用禁止なのに堂々と校則違反できるよあんたは……
で、どうした？」

「兄さんから親戚の迎えに行ってくれて」

聞き入れたことを返送しつつ由里香に答える

「あんたの親戚ってことは美形？」

「確かにあの人は美人よ。なんでそうなるのかわからないけど」

「だってあんたの家族みんな美形だし」

羨ましいんだ、と叫ばれてもね……

私からみればあなたは美人に該当するんだけど？

そう思っても口にしたら図に乗るので

「バカなこと言わない。どうせついてくるんだから行くわよ」

「さすがに私の性格を把握してるね」

「分かりやすいのよ。変な勘ぐりされるくらいなら直接会わせて理解させた方が身の為なものね」

過去にそれで大変なことになったもの

駅前についたけど美沙斗らしき姿は見えない

仕方がないので由里香と会話をして時間をつぶす

それから数分で美沙斗がやってきた

「美沙斗さんっ」

「君は、千秋ちゃんだったかな」

「はい、お久しぶりです」

「久しぶりだね。その子は、お友達……かな」

「まあ、そうです。私は村上 由里香です」

「私は、御神 美沙斗って言うんだ。千秋ちゃんのこと、よろしくね」

「むしろ私が迷惑かけてます。にしても、さすが千秋の従姉です。負けず劣らずの美人ですね」

ああ、そっか

確かに初見ではそう思っちゃうか

「由里香、この人は私の叔母に当たる人よ」

「え？ 本当に！？」

戸籍上叔母、実際は娘ですが何か？

まあ言っても信じてもらえないだろうし

ん、この子なら信じるか

彼女自身いろいろと知ってるみたいだから

「いっや、すごく若いからてつきり」

「お世辞でも、そう言ってもらえるのはうれしいよ」

「「世辞で言ってますから」」

不破も御神も肉体が老いにくいよね

「………なんかどっかの戦闘民族みたい

あ、私たちも一応は戦闘を生業にしてる一族か

アレほど凶暴でもないけど

「由里香。私たちは今から翠屋に行くの。」

最近は何事だから由里香も一緒に行く？そこで藤枝さんに連絡して迎えに来てもらえば」

「了解。よし！今日は千秋のおご」自分で払いなさい」・・・今日は一段と厳しいよ」

いちいち泣かないでよ・・・

美沙斗がこつちを微笑みを浮かべて見てるじゃない

その後翠屋で藤枝さん（40歳・男性で土郎の友人だとか）が来るまで三人で共通の話題である銃器について話しながらお茶をしてお開きとなった

現在、私たちは高町家に向かっている

うれしそうにこつちを見ている美沙斗は口を開いた

「本当に変わったんだね」

「まあね。この街に居る限りまだ千秋で居られる。殺めることに嘆

き、悲しみ、悔やみ続けることでしか存在できなかった千秋^{おれ}を少しでも忘れることが出来る。でもね、最近はそうもいかなかったんだよ」

「兄さん、ですね」

美沙斗でもわかるか

昔から自分の顔が土郎の前妻であり恭也の実母、夏織に似ていることは知っていた

その為戦闘時に厄介なのを我慢して長髪にして束ねていた

去年の夏、髪を束ねた状態の自身を鏡で見て驚いた

若干幼いものの、そこには間違いなく夏織が存在していた

「以来、かな。この環境が壊れるのが怖くて髪を束ねなくなったの」

「不自然じゃないかな」

「だったんだろうね。恭也や美由希ちゃんには怪しまれたし、土郎に意識させてしまったかも。」

でも私が怖かった。ああ、そっか。別人みたいに感じてても、やっぱり高町 千秋は不破 千秋だったんだ。大切な物がなくなること怖くなると逃げるのは変わらない」

なんか、悔しいな

やっと変われると思ったのに、過去の行いは影のように付いてまわり、いつまでも俺を苦しめる

もう、壊れたくなんてないのに

「父さん、それは誰でもそうなんじゃないかな。弱さに逃げるのは人として仕方がない、当たり前なんだと思う。私も美由希を護って生きていくこと、静馬さんが死んでしまったことから逃げて龍に復讐することに走ってしまった。父さんは過去、私は現在と未来からと対象は違うけど逃げてしまった。

でも、肝心なのはそれを受け入れて歩むこと。兄さんと恭也君にそれを教えられたんだ」

「・・・・・・・・」

「何があつたのか。父さんも母さんも教えてくれなかったからわからない。

悲しむのも、悔やむのもいいと思う。でも受け入れて今後を精一杯生きて欲しいって私は思ってる。

これは兄さんも桃子さんも思ってるんじゃないかな」

「そう・・・・・・・・か。ありがとう」

わかってるけど肯定できない

それでも私のために言ってくれているので感謝しておく

そのままの話でいるのもなんなので、美由希ちゃんの話題に切り替え、それは家について美由希ちゃんと会うまで続いていた

その日の夜から物語は始まった。

後に聞いたなのはと似非フェレットの出会いの少し前の話

何の為に生きていたのかわからなかった自分の意味を、理解するのはもう少し後だった

第1話（後書き）

村上 由里香

千秋の友人。

家族構成は両親と兄。

目先の欲求を我慢せず満たそうとする性格で千秋を振り回そうとするも、軽く制御されている。

幽霊妖怪の類は中途半端に感知できる為苦手で全力で否定しようとしたがる。

父親が社長の為金持ちではあるものの、月に自分で使用する金額は決めそれをちゃんと守ると金銭感覚を狂わせないようにしている。

勉強は得意で、運動も平均を上回る（5段階評価で体育は4、五教科は全て5をキープしている）。

ガンマニアで毎月モデルガンを買っている（千秋はそれに付き合っている）。

実はAAランクの魔力持ち

第2話（前書き）

書き忘れていましたが、千秋は実年齢を覚えていません。

なので五十歳と表記してあるのも千秋がたしかコレくらいだろうという年齢です。

実年齢はもう10歳程度上ですが、正確な年齢は脳内補完してください。

あと今更ですが、誤字脱字を発見した場合伝えてくれるとありがたいです。

第2話

美沙斗が家にやって来てその日は土郎、美沙斗、恭也、美由希ちゃん、私の5人で鍛錬することになった

基本的に美沙斗を相手にして他の3人で問題点の話し合いをしたり、切り抜け方の討論や実践を行う

単にいつもどおり実践形式で打ち合いもする

日付が変わるくらいで鍛錬を終えて家に帰る途中、相棒が異物を発見したことを教えてくれた

「ん……ちょっと気になることが出来たから行ってくるよ」

「わかった。怪我をしないようにな」

私のことは話してあるので誰も大して気にせず、私を送り出してくれた

このあたり一帯に気配がないことを確認した後相棒に声をかける

「ミラル、異物の場所を」

「了解です主。異物はここから西方に100メートルほど行った所に。恐らくロストログニアでしょう」

「何処から流されたみたいね・・・」

相棒のアドミラル、通称ミラルに搜索してもらう

念のため急ぎ向かうと、そこには小さな青い石が

その石を警戒しつつ拾い上げる

「時空管理局データベースにアクセスしました。対象の情報に近似したデータは45件、その中で最も近いデータを発見。主、どうやらそれはC級のロストログア、ジュエルシードという名称だそうです」

「効果は？」

「願いを叶えるというものらしいです。尤も、歪んだ形として叶えられることが大半のようですが」

歪んだ形ねえ・・・・・・

まあC級とはいえロストログアなんだし、誰かが欲しがらんでしょう

「たとえそれが犯罪者であつてもね」

「本来なら持ち主に返すべきなのでしょうが・・・」

「知ったことじゃない。」

犯罪に使用される？関係ないわ。別に共犯なわけじゃないし、必要とする人物に渡したただけなもの。

所持することすら違法？それも一緒。こっちは一応管理外世界とやらの民間人なんだから。

こっちは大切な人を守るだけで手一杯なんだから身の危険の除外を優先させてもらう」

「単に彼らの言いなりになりたくないだけでしょ」

「ご明察とおりですよ」

ジュエルシードをポケットに入れ、とりあえずは帰宅することにしたけど、そうさせてはもらえないみたいね

「——主、こちらに向かってくる魔力反応が。それも二つ」

「こっちも確認したわ。人間の気配、それと獣っぽいものの二つね。いつものようにしてて」

「わかりました。怪我の無いよう、お願いします」

ミラルが黙って数秒後にそれは空から現れた

金髪をツインテールにした赤い瞳の女の子

年はなのは位ね

もう一つの気配のほうは息を殺して背後に回っている

気配を殺してないから丸わかりなんだけどね

「すみません。ここの近くに変な物は落ちてませんでしたか？」

こちら。空飛んで来たの見られて平然としてるんじゃない

管理外世界でしょう、ここは

「変なもの……きわどい服装の少女が今しがた落ちてきたけど……

」

「……あつ」

記憶を消せばいいと思ってるのかと思えば、この世界では異常だつてことすら考えてなかったみたいね

私に言われてあわててる姿にちょっと和む

「えっと……私じゃなくて」

「そう。じゃあこの石のことね」

ポケットからジュエルシートを取り出すと女の子の表情が変わる

後ろの獣も少しずつこちらに来ている

「それを渡してください」

「ん……いやだといったら？」

そういった直後、後ろの獣が襲いかかっていた

速いけど、事前に知っているから奇襲にならないのよね

逃げることもせず、タイミングを合わせて鳩尾を突き、脳震盪を起こす程度の力で顎を蹴り上げる

「アルフッ！」

「殺気立った獣に気づけないほど、鍛錬を怠っては無い」

女の子と獣は仲間だった

いや、わかってたけどね

「安心して、渡さないとは言っていないんだから。
そっちの獣、アルフだっけ？あまりにも隠れる気がなかったみたい
だからつい
数分もすれば立てるようになるから」

私は近づいていき女の子にジュエルシードを渡す

「あ・・・・・・・・ありがとう」

「どういたしまして。素直に感謝できるのはいいことよ」

それだけ言って帰ろうとしたら女の子に呼び止められた

「あの・・・・・・・・名前は」

「私？千秋っていうの。そういうあなたは？」

「フェイト・テストロッサです」

フェイト——運命もしくはそれをつかさどる三女神を示す言葉

運命に付き従うもの、あるいは抗うものとして親はつけたのかしら

「いい名前ね。それじゃあおやすみなさい。

夜更かししすぎないように。あなたは可愛いんだから」

そう伝えて、帰ることにした

いい加減眠かったし

「——っ、ここは？」

フェイトから分かれた後汗を流してすぐに寝たはず

なのに目の前に広がるのは自室じゃなく草原

「おお、やっとこっちに着たか」

っ！

気づいたら真後ろに男がいた

「ん？ああ驚かせたか。悪かったな？」

「疑問符をつけるな」

「悪い。自己紹介がまだだったな」

男は適当に私との間隔を開けて座る

強いわね・・・勝てる気がしない

「俺は——何なんだろうな」

「・・・・・・・・・・はあ？」

「何を言ってるんだと思ってるかもしれないけど、しかたねえだろ。人によっちゃ神って崇めるやつもいれば殺戮者なんて貶すやつもいる。ようは見方次第なんだよ、俺はね」

頭の痛い人間、てわけじゃないようね

直感がコイツを人として認めてない

「とりあえずはお前の持つ書、旧相棒って呼んでるのを作った存在だと思ってくれ。」

んでここは幻想世界だな。まあパン屋の娘とかは関係ないから崩壊することはない」

「なにを言ってる」

「気にすんな。いい加減説明しないといけなかったから夢という形で呼んだだけだから」

夢か

私が作った幻想という可能性もあるけど、信じるべきでしょう

あの子を知ってるみたいだし

「ふむ……んじゃ話をしようか。」

不破 千秋、お前はあの日死ぬはずだった。でも直前にとある願いを思考した」

「……それは？」

「自分で思い出せ。」

で、それを聞いていた俺が叶える代わりにお前を生かした」

……ちょっと待って

それはおかしい

「利点しかないけど」

「まさか。お前にゃあ俺の代わりに動いてもらうんだよ。仮初めの命ってことだ。まあそのせいで年齢と性別を変えちゃった」

納得

変えられたのなら仕方がないか

「で、どうしてこの顔にした」

「殺気立っとなつての。俺だって心苦しい。

その顔なら求めてる情報も手に入ると思ってたな」

——なにを言っている

「無意識のふりを続けるか？最後の子」

「……ろ」

「現実から目を背けてあんなことをしたんだろっつが、壊し方が甘い」

「……めろ」

「それに過去は自分についてくる。自覚してるんだろうが、護る意志が弱いんだよお前は」

「止めろっ！！！！」

[illegible]

「お前になにがわかる！」

「心中までは察してない。でもな、そのままだと周りから取り残されるぞ」

つ

そんな事わかつてる

でも仕方がないんだよ！

「——突き過ぎたか。落ち着け。とりあえずジュエルシード、それにフェイト・テストロッサに注意を払っておきな。別に観測するだけでもいい」

ため息について男はどこかへ消えてしまった

何なんだアイツは

俺の過去を知ってるのはまだ理解できる

なぜ見透かしたように会話ができるんだ

そのまま考えて答えは出ないまま朝を迎えた

今日は休日

夢があとに引いていて、鍛錬を休むことにした

「千秋、なのはを起こしてきて」

「わかったよ。」

さて、お寝坊さんを起こしに行きますか」

気分転換にはなるでしょう

二階に上がりなのはの部屋に入る

私の部屋と違って女の子らしい部屋

そのベッドで眠っている妹に近寄る

どうやら携帯のアラームを止めて二度寝を行ったらしく、
痕跡が残っている

学習しないわね

私はなのはが息を吐くのを確認しすぐに鼻と口を塞ぐ

大変危険ですので真似しないように

三秒経ち、表情に変化が起きる

十秒経ち顔が赤くなる

それから一秒も経たないうちに目を開けた

それを確認して私は手を離れた

当たり前だけどなのはの息は荒い

「おはようなのは。いい夢は見れたかな？」

「…………おはよう、千秋お姉ちゃん。
もう少し優しく起こしてくれると嬉しいです」

そんな悪魔を見るような目をしない

「言つてあつたでしょう。二度寝した、もしくは寝坊したらこういう起こし方をするって。それに、今に始まったことでもないでしょ」

この行動に出るようになったのはなのはが小学生になったときから既に三年目なのに週に三回は行っている

ちゃんと命に別状がないようにしてるし、大丈夫でしょ

「休日だからって寝坊はさせないからね。

父さんや兄さんが甘やかすなら、私が厳しく接しないと将来結婚できなくなってしまうじゃない」

「思いやりがあるのはわかるけど、少し泣きたいよ……………」

聞こえないわね

「朝ご飯出来てるから、すぐに着替えてくるように。もしまた寝てたら……………」

そこで言葉を切って、部屋を出て行く

コレでもう一度寝ることはないでしょう

戻ればすぐに食べられると思うので、なのはを待つ

数分でなのはが出てきた

「ちゃんとした格好ね……………それじゃあ行きましょうか」

「うん！」

食事はいつも両親がバカップル振りを見せ、恭也と美由希ちゃんが仲良くしている為、二人で会話をする事が多くなりなのはとの仲は比較的良好—————というか、軽く依存されてるような気がする
どうも脅迫概念を持つてみたいだし、コレが事故につながらなければいいんだけど

つと、それはともかく

今日は美沙斗がいるため、会話が変化してくる

「母さん、今日はどうするつもりなの？」

「そうだね……………特に予定はないよ」

あ、ヤバイ

恭也の目つきが変化した

先手を打っておくか

「じゃあ姉さんとなのはに街を案内してもらったらどうです？
丸一日かけて行つのもいいかもしれませんね」

「私も予定無いし、そうしょっかな。なのはは大丈夫？」

「大丈夫だよ」

「なら、頼めるかな」

美沙斗の言葉に二人とも肯定した

そんな仲のいい光景を見つつ、恭也から殺気を浴びる

それに応え二人でアイコンタクトの会話をする

—— せっかく鍛錬に誘おうとしたのに

—— くらくら。休暇にまで疲れさせるまねはさせないようにしてよ

——美沙斗さんなら快く受けてくれると思うが

——そういう問題じゃないでしょう。せっかく来てくれたんだから、二人の時間を作らないと

この間1秒ほど

何故なのは巻き込んだかといえば、長い間会わなかった美沙斗と美由希ちゃんのために緩衝材代わりになってもらう為だ

まだ何か言ってこようとしていたがスルーしておく

殺気には殺気をぶつけ返しておいたので大人しくしてくれるでしょう

美沙斗たちが出かけていった後、私も散歩することにした

理由は夢で男が言っていたフェイト嬢の搜索だ

何故アレが気にかけるのかわからないけど、生かしてもらった対価くらい払っておかないと

あれ？今思つと、こつちの承諾の無い一方的な結果なんじゃ

……考えるべきではないか

一通り街を歩いてみたものの、見つからない

金髪の子供はこの街に滅多にいないため目立つのに……

ちなみに金髪でもツンデレな女の子なら発見した

少し休憩する為に八束神社に足を運ぶ

石段を全て登りきったところで、とある人物を発見する

「おはようございます、那美さん」

「千秋ちゃん、おはよう」

ここの巫女兼管理代理のバイトをしている神咲　那美さんが笑顔で
応対してくれた

「今日も久遠に会いに来たの？」

「はい。で、その久遠は何処に」

そう聞いた途端、背後から何かに抱きつかれる

急なことで倒れそうになるものの立て直す

「——久遠、急に抱きついてきたら危ないわ」

抱きついてきた犯人に注意するが、当人はうれしそうに擦り寄ってくるだけで反省の色は見られない

この子らしいといえらしいけどね

「千秋ちゃん、許してあげてね。」

3月に会って以来だから寂しかったみたいだよ？」

「それはそうですけど、コレが大人状態だったら間違いなく私は押し倒されてましたよ」

久遠は行き過ぎた愛情表現をしてくるときもあるのでそのまま——

——
っと危ない世界に入ってしまうところだった

その考えを読み取ってくれたのか、那美さんは苦笑していた

とりあえず久遠を引き剥がし、顔を向き合わせる

「ちあき、ひさしぶり」

「久しぶり。でも、うれしいからって急に飛びついたら危ないでしょう」

「くう……ごめん」

ちゃんと反省してくれたようだ

頭をなでながら許した後、そのまま久遠のために午前中時間を潰すことになった

第2話（後書き）

アドミラル

千秋の持つデバイスの管理人格
主至上主義な性格をしている為基本的には逆らわないうえなんでもやる

「コレで実体があれば」と千秋にも言われ当人もないことを悔やんでいる

特技は隠れることと隠すこと

第3話（前書き）

投稿するのに時間がかかってしまい、すいませんでした。

話の区切りをつけられず、そのまま仕事が始まって書く暇と体力がなく、いつの間にか1ヶ月以上経ってしまった・・・

第3話

——しまった

久遠との遊びに夢中になってフェイト嬢を探すのを忘れてた

「すみません。人探しの途中の息抜きだって事忘れてました」

「人探し？」

「はい。金髪で赤い瞳の女の子ですけど、みてませんか」

那美さんは思い出そうとしているものの、結果は良くないものだと思う

仕方がない

「久遠も一緒に行く？」

「くうん」

久遠は頷いて子狐化した

妖狐って便利ね・・・

「それじゃあ那美さん行つてきます」

「いつてらっしゃい。久遠、ちゃんと帰って来るんだよ」

久遠を肩に乗せて那美さんに挨拶し、再び搜索を行うことにした

フェイト嬢はすぐに見つかった

臨海公園をアルフをつれて歩いていた為に目立ってくれたのがよかった

まあ、狐乗せてる少女も目立つか

故に二人とも同じタイミングで互いを発見した

「おはよう、テストロッサちゃん。それにアルフだったかな」

「おはようございます、千秋さん」

互いに挨拶してる最中、アルフはこっちに唸っている

おかげで久遠がパニック状態で困る

「アルフ、そうしてるとご主人様の評価が悪くなるわよ」

そういうと唸るのを止めてくれたけど、こちらを警戒したままだ

フェイト嬢もそれにたいして申し訳なさそうにしていた

「何か探しのもの？可能な限り手伝うけど」

「いえ、これ以上巻き込むのは」

「そう？なら仕方がないけど。」

ああ、紹介するわね。この子は久遠って言うって私の友達」

そう紹介するも、久遠は身を隠そうとしている

しかし肩に乗ってるから隠れる場所はないため姿はフェイト嬢に見える続けている

「ごめんね、人見知りがつよいこなんだ。怖くないって理解すれば近づいてきてくれるから」

フェイト嬢はすこし残念そうにしていた

まあその獣のせいで余計怖がってるというのもあるからだいぶ時間がかかるとおもう

「そうだ。おなか空いてない？」

「いえ、だいじょう——」

大丈夫じゃなかったらしく、フェイト嬢のおなかからかわいらしい音がした

思わず笑ってしまい、フェイト嬢は顔を赤くして俯いてしまった

「よし！お姉さんが奢ってあげましょう」

「そんな、悪いです」

「悪くないよ。それにもし一緒にいてあなたに明らかに年下の子にお金を払わせたら周りの人たちの評判が悪くなっちゃう」

「一緒に食べないって選択肢は「ない」……………わかりました」

大人しく連れて行かれる気になってくれたようだ

さて、何処かの店に……………ダメか

その獣が問題ね

「アルフって人間になれない？」

ちょっと昔のことを思い出して口にする

冗談半分で言ってみたのだけど、驚いた様子から出来るんだね

「まあ出来るかどうかは関係ないか。

少し無理を言って母さんたちに許可をもらおう。

ちょっとまってね」

フェイト嬢に待ったをかけて携帯で桃子さんに連絡を取る

数回コールした後に桃子さんが出てくれた

「もしもし、ちょっとお願いしたいことがあるんだけどいいかな？」

「OK出せるかわからないけど、とりあえず聞かせて？」

「ペット連れてる子にご飯奢りたいんだけど、いいかな？」

「ん……その子のペットが他のお客さんに迷惑をかけないなら、テラスで食べてもらいなさい」

「ん。ありがとう」

「娘の為だもの。じゃあ後でね」

携帯をしまい、フェイト嬢のほうを向く

「アルフが迷惑をかけなければいいって。それじゃあ行きましょう」

「はい」

フェイト嬢を翠屋に案内しながら、互いのことを詳しく知ることにした

「テストロツサちゃんて歳は9歳くらいだったたりする?」

「はい。あ、フェイトで構わないですよ」

「了解。私は14歳ね」

あ、驚いてる

今まで年齢聞いて驚かなかったの由里香くらいじゃなかったかしら

「驚く理由がわからないけど……」

わからないっていうのは嘘だ

わからなくて由里香に聞いたなら「落ち着きすぎで年上に見える」といわれた

「上級生にお姉さまと呼ばれたときは頭を抱えなくなっただわ……」

「えっと、がんばってください」

なにをがんばるのか教えてください

あまり思い出したくないので思考から消し去る

「今から行くところは翠屋って場所でシュークリームがとてもおいしいお店。」

あ、シュークリームでわかるかな。シュ・ア・ラ・クレムとかクリーム・パフとか呼ばれてるの」

「食べたことないです」

「そう。ならおやつに持っていくといいわ。アルフの分も包んであげるから。勿論私の奢り」

「そ、そんな悪いです」

「お金は有り余るから気にしないで」

以前作らされた口座を見たら数字が6つならんでた

以来見るのが少し怖くて見ていないがおそらく7つ目以降がついて
いるだろう

歌手って儲かるんだと思ってしまった

ちなみに桃子さんに少しお金譲ろうとしたら「自分で稼いだんだから
自分で使いなさい」と断られてしまった

なのでお金は消費したいくらいだ

「むしろお金を消費するのを手伝って欲しいかな。頼めるかしら？」

「・・・・・・・・わかりました」

もしかしたら頼まれたら断れない子だと思いついてみたがどうやら
正解だったらしく、こちらをお願いを受け入れてくれた

でも無理に食べようとしなにか心配になってきたわね・・・

そのときは私が止めればいいか

他愛もない会話をしながら私たちは翠屋に着き、注文すると一息つくふと、フェイトが何か聞いたそうにこっちをみていた

「どうかしたの？聞きたいことがあれば聞いていいわよ？出来うる限り応えてあげるから」

「どうして夜のことを聞かないんですか？」

なんだそんなことか

「そっちの事情ってものを考えたから、かな。昨日の様子じゃ隠さなくちゃいけないことみたいだったし。アレが何なのかってものも興味ないし、危険な物だったとしても私の大切な人たちに向けられない限り、行動するつもりはないわ」

「そうですか」

まあ、この子に人を殺める覚悟はなさそうだし、警戒は別のところに向ければいいだけ安心か

場合によってはこの子を餌にするつもりだし、逆に護る覚悟もある
フェイトは考えるように俯く

実際はアルフと念話で相談していたようだがなにかを決意して顔を上げる

「千秋さん、私は魔導師です」

「・・・そう。じゃあアルフは使い魔ってところが妥当かしら」

「驚かないんですか？」

「まあね。この街は人外魔境ともいえるからね・・・」

HGS患者が数人、霊剣が二振り、退魔師が2人、弾丸を避ける人間が4人、妖狐に魔獣に夜の一族

昔は暗殺者やら幽霊やら忍者やらもいたくらいだから今更魔導師って新種が来ても驚けないわ

それに魔導師はここにいますし

「久遠、それじゃあ食べにくいでしょう。変身していいわよ」

「くうん」

一鳴きした久遠が子供状態になるとフェイトたちは驚いていた

んー・・・次に来る言葉は「使い魔ですか？」か「あなたも魔導師

だっ たんですか？」 かな

「あなたも魔導師だっ たんですか？」

B I N G O

わかりやすいか

「違うわ。この子は妖狐っていう・・・まあ表には出てこない動物だと思っ て。もちろん秘密にしてね」

「わかりました」

「（わかつ たよ）」

この主従は何処か抜けてるのかしら

普通急に念話されたら戸惑うわ

「これが念話かしら？ 普通は戸惑うわよ？」

「（あゝ・・・まあいいじゃないか。結局アンタも驚かなかつたし）」

「それに対して応えなきゃいけない私は周りから見ればイタイ人間

になるわね」

「良かったら、教えましょうか？」

「（ああ、こんな感じでいいんでしょう？）」

直感で念話を使用して見たが、成功だったらしく二人の表情が変わる初めて使ったけど、案外楽ね

「（取り合えずアルフとの会話には念話で答えるわ。ただでさえ年相応に見られてないのに犬に話しかけてたらかわいそうな人に見られるわ）」

「（・・・そうだね。ただの犬に声をかけてたらわたしもそんな目で見るよ）」

「ん、それよりもなんであの石がほしいのか知りたいわね」

念話をする前の言葉につなげるようにそういったら、二人の表情に変化があった

フェイトは悲しみと怯え、アルフは怒りと心配が浮かんでいる

・・・どうもよくない存在みたいね

一体誰なのかしら

「それは、かあさんが集めてほしいからって。何に使うのかは知りません」

母親か・・・

察するにフェイトに対する扱いが恐ろしく変化して虐待しているって感じがしら

「（主、彼女の姓のテストロッサで探りますか？）」

「（ん、お願いねミラル。ああ、年齢は現在19〜60くらいまでで探して。犯罪記録から管理世界の住所録まで隅々と。高年齢の場合娘を事故で亡くしてる方で探すと楽かもしれない）」

「（わかりました。翌日までに調べ上げておきます）」

にしても、フェイトは何故か親近感が沸くわね

魔法を使える人間に久しく会ってなかったからなのか、それとも――いえ、止めておきましょうか

この探りに意味はない

ただ沸くだけでいいじゃないか

下手に傷口は開くべきじゃないもの

「そう・・・じゃあまた見つけたらあなたに渡してあげるわ」

「ありがとうございます」

「ああ、ふと疑問に思ったんだけど」

「なんですか？」

「アレを運搬してたとき、この世界にはいなかったのよね？」

「はい。運んでいた船は高次元空域を移動していたときに事故を起こしたそうです」

「じゃあ、この地に全て落ちたとは限らないわよね。仮にこの世界に全て落ちたとしてもこの世界以外から落ちたのなら拡散してるだろうし。この星の表面積は 5.09949×10 の八乗平方キロメートルもあるから探すのは大変よ？」

あらら。考えてなかったみたいね困惑してる

どうするべきか

「とりあえず、ここ近くの世界三つ四つさがして、それで見つからなかったら戻ってきなさい。」

この世界の石は私のほうでなんとかしておくから」

「でも、封印は大変ですよ？」

「（覚醒すると暴れるみたいだからねえ）」

「確かに封印は出来ないでしょうね。でもこの世界では力あるもの同士が集まりやすくなるようになってるみたいなのよね。この世界に入ったら逃れられない呪縛みたいな感じに。しばらく放置しておけば海鳴に集まりきるんじゃないかしら」

「そうですか、とつぶやいたフェイトは悩む

ちなみにこの地に呪縛なんてない

実際は私がある程度引き寄せておくだけだ

夜の一件でアレから出る力の特徴はミラルが（勝手に）記録してくれている為同等のモノを寄せるぐらいは出来る

問題は手元に来ないことと、何処にそれがあるのかが術者の私もわからないってこと

正直大変勝手が悪いが、被害が広域化しただけマシだと割り切った

「それじゃあ、お願いします」

「任されたわ」

ちょうど注文したものが届いた

ってあれ？

アルフの料理をみて目を擦り再確認するけど、見間違いないみたいだ

「・・・・・・なんでそんな分厚いステーキが出てくるんだろ」

目測で厚さ4センチはあるわよ

店員が苦笑して「店長が何処からかもって来たんです」と応えてくれた

大きい犬なのを確認して取り出してくれたんだろうけど

「いつものことながら、頭が上がらないわね。いただきましょうか」

「いただきます」

ちゃんとこちらのテーブルマナーも学習してるのね

フェイトは料理を一口食べ、顔を綻ばせる

アルフは凄い勢いで尻尾を振っている為、二人に感想を聞く意味がなくなった

幸せそうな表情を見てこちらもうれしい

そのまま静かに食事を終えて、ゆっくりしていると桃子さんに呼ばれた

視認できるけど会話が聞こえない程度にフェイトから離れたところで用件を聞く

「どうかしたの？ってやっぱりあのこのことだよね」

「ええ。あのこの両親はどうしてるのかしら」

「わからないよ。母親の探し物を手伝ってるらしいけど、普通じゃない。

空腹状態のままだし、ろくに睡眠もとってないみたいだし、虐待してるって考えてもいいかもしれない」

「やっぱり……………」

桃子さんも気づいてたか

フェイトの目は昔のなのと同じで、愛情に飢えているときに見ることが出来るもの

それを桃子さんも、いや高町家の人間は全員放っておけなくなる

恭也と美由紀ちゃんは実の母親の愛情を幼い頃に与えられなくて

桃子さんと士郎はなのはを一人ぼっちにさせてしまった経験から

なのはは孤独であることの共感から

そして私も……………

だからフェイトに出会ってジュエルシードを押し付けることに迷い
選択肢が出来た

いつもならただ駒として利用するだけなのに、ね

「すぐに虐待をやめさせたらいいんだけど」

「無理とは言わないけど、苦しいよ。今フェイトと一緒に住んでる
可能性は低いし。」

フェイト自身が虐待を受けてると思ってないみたいだね。今問題
を起こせば心に傷を作っちゃうだけだから」

「そう……」

他人のことで必死になれるこの人は間違いなくいい人なんだろうと
思う

しばらく考えている様子だった桃子さんはなにかいい案が思いつい
たようで、顔を上げる

「千秋、しばらくあのこと一緒に暮らさない」

「……………Why?」

何故そうなるのでしょうか？

「拒否権はないわよ」

「……………ラジャーです。っても、しばらく遠くへ行くみたいだからその後からになるけど」

理由を応えてはくれなかったけど、たぶんせめて家の暖かさだけでもあげたかったのだろう

けど桃子さんと土郎は仕事があるため無理

恭也じゃ性別が違ったため溶け込みにくい

美由紀ちゃんも料理が壊滅的だからダメ

なのは心配

というか皆接点ないしね

家に誘えばいいけど、断るだろうと桃子さんも考え、接点があり、料理も人並みには作れる私を送り込むことにしたのだろう

隣の市なら学校まで走って通えるし

「がんばってね」

「うん。」

あ、このことは士郎だけにね。あの子は私寄りの人間だから」

魔法関係者なのであまりなのはに干渉してもらいたくない

隔世遺伝なのか、なのはには魔導師の可能性を持つ

それも異様なまでに

今は私の方で感知できないようにしているものの、念には念を入れて外因を除き続けている

あの子には出来るだけ私たち闇の住人に関わらないで、光の世界で笑っていてくれることを願っているから

「わかったわ。」

あ、シュークリームはもう少しで出来るから待っててね」

「そんなときに来ないでよ!？」

ミスしたらどうするつもりだこの人は

桃子さんは私の突っ込みをスルーしてさっさと厨房に戻っていった
仕方ないのでフェイトの元に戻る

どうやら久遠と仲良くなれたようで、会話をしている

まあ、二人とも口数が多いほうじゃないみたいで、ゆっくりしたものだっただけ

「仲良くなれたみたいね」

「はい」

「フェイト、優しい」

「そう、よかったわね」

頭を撫でてやると久遠は売れしそくに尻尾を振っていた

このままだと本題を忘れそうなのでさっさと言うことにしよう

「一つ提案があるけどいいかな？」

「なんですか？」

「しばらくあなたの家に住んでいいかな？」

やっぱり固まったか

一応利点を挙げておきましょうか

「どうもしつかり食べてないみたいだから私が作りにいきただけなんだけど、あなたにも利点はあるわよ」

「……教えてください」

「警戒しなくても……」

まあいいか。一つはさっき言った力を引き寄せるということ。あなた達の求めるものが私がそちらにいただけで多少なりとも見つかりやすくなるかも。

二つ目は人員の増加。たった一人でも効率上がるから。あ、平日の昼間は学生だから無理だけど。

三つ目は鍛錬に付き合っただけで上げることができる。これでもそこそこ強いからね。

これくらいかな？」

理解しやすいようにゆっくりと話してみたら、考え出した

欠点や問題点を考えてるのだろう

それらで一番わかりやすいのは拠点が発見されやすくなる、だろう

まあ監視されてたら撒く自信はあるけど

しばらく考え結論が出ると顔を上げた

「わかりました」

「よろしくね。流石にそっちの事情もあるだろうから、フェイトが帰ってきてからでいいかしら」

「かまいません。戻ってきたら連絡します」

「わかったわ。アルフ、フェイトのこと、宜しく頼むわね」

「（言われなくてもわかってるさ）」

よろしい

その後私たちは今の魔法について話し、フェイトにシュークリームを渡して解散することになった

にしても

まさか大変なことになるなんてこのときは思いもなかったわ

第3話（後書き）

次から原作に入ります。

とは言っても千秋はなのは側でもフェイト側でもないため基本闘わないんですけどね。

次回はたぶん3話分まとめて書くと思います

第4話

変な夢だった・・・

黒い塊となのはと同年齢くらいの少年が闘う夢

気になるのは少年がこの世界ではありえない格好で魔法を使っていたこと

そして何処から漂ってくる魔力を使った痕跡

恐らくアレはリアルタイムで見せられていたものだろう

ならあの少年はジュエルシードを探しに来た可能性が高い

よりもよってフェイトが別世界に行った直後に来るなんて

序盤に敵対者と遭い無駄に疲弊しないことを喜ぶべきか、わけのわからない存在にモノを持っていかれることをフェイトに謝罪すべきなのか、問題ね

悩んでも仕方がないので、さっさと着替えて朝の鍛錬に参加しよう

・・・

いつの間にか自身の裸に抵抗がなくなったなあ

女であることを否定したかったのに

まあ、今後また抵抗が出てくることに期待するか

そろそろ体つきも変化するだろうし

ああ、胸が大きくならないようにしないとね

邪魔になるし

学校に着くと、普段は遅い登校をする由里香がすでに来ていた

寝付けなかったのかとても眠そうだ

「おはよう。眠そうね」

「んー・・・そうだね。変な夢見せられてそれが睡眠時間に加算されてないかも」

やばい。こんな由里香を見るのは初めてだ

なんかもう、いやだ

「って変な夢？」

「そうだよ。子供が黒い何かと闘う夢」

由里香も見た？

ならますます魔法関係の可能性が高くなった

由里香も高い魔力を持つから

どうも考えが足りないらしく、違法滞在している魔導師がいる可能性を無視した行動だ

犯罪者だったら普通に飛びついてくるわね

それとも違法滞在していても魔導師なら必ず協力してくれると思っているのだろうか

前者なら年相応、後者なら世間を知らない人物ね

「所詮夢でしょう。それに振り回されるなんてらしくないわよ」

「そうかな。」

まあいいや。睡眠不足を補うために寝る」

「そうしなさい。ノートは写させてあげるから」

「よろしく。．．．．．すう」

限界が来ていたようですぐに寝てしまった

そろそろ由里香に魔法とか護身術とか教えるべきかな

一度こういうことがあるとその後何度も関わることになるって定番だからね

とりあえず由里香に合うデバイスと魔法を考えておきましょうか

由里香の分まで授業に励みつつ鍛錬内容を練りあげていった

「フェレット?」

「うん。これくらいのこなんだけど」

帰宅したのはがフェレットを拾ったことを告げた

「この辺りの動物病院っていうと愛さんのところ、槇原動物病院よね。つてことはあのこか……あれをフェレットとは言いづらいわね」

「知ってるの？」

「あそこの院長さんは知り合いだから寄ってみたのよ。そのときいたこかなって」

フェレットというにはどこがおかしいと感じてしまう

それに魔力反応が微かにしたため恐らく本当はあんな姿ではないの
だと思う

「ところで、フェレットってなんだ？」

士郎の台詞に一同脱力してしまった

「イタチの仲間だよ父さん」

「雑食性の動物だから何でも食べるわよ。

知人から聞いた話だと旅行にいくからフェレットと小型犬を近くにおいて出かけたら帰ってきたときに小型犬の毛皮とフェレットしか残ってなかったなんてこともあるみたい」

「それだけ聞くと危ない動物にしか思えないぞ」

「癡猛つてわけじゃないから安心して。大方この話も餌が十分じゃなかったとかそもそも事実じゃないとかそんなオチだろうしね」

もし似非フェレットが人間ならそんなことをするわけないだろうし
万が一そんなことになったら生きたまま皮を剥いでやる

「とりあえず、私は反対はしない。母さんたちがいいって言ってるのは十分に世話をできる、他人任せにしないっていうなら飼いなさい」

「そうだね。私も反対しないよ。それにどんなこか見てみたいかも」

美由希ちゃん、あなたなら確実に可愛がるわ

「どうする？母さん」

「私も千秋の出した条件を守ってくれるなら、いいわ」

「うん！」

なのは心から喜んでいた

対して私は心から神を恨んだ

神なんか信じてないけどさ

とにかく、あの珍獣はなのはを——本人にそんな気がなくても——利用するだろう

ここまで来てしまったのなら、私は見守ろう

もしなのはが大怪我するようなことがあったのなら、覚悟してもらいましょう

一般家庭なら寝静まる夜、御神の皆は鍛錬に励んでいた

私は美由希ちゃんと鍛錬をしつつこれからのことを考えていた

ふと、心の奥底に響くように少年の声が聞こえ——って

「ばかじゃないの!？」

無差別に念話を送るなんて馬鹿げてる

思わずそっぽを向いてしまい、それを隙と見た美由希ちゃんが小太刀を振るう

まあ、気づいてたから避けつつ足払いで転倒させる

「いたたた・・・」

「そっぽを向いたからって意識を全てそっちに持っていくわけない
つて。ごめん士郎、ちょっと見てくる」

「ん？・・・ああ。怪我しないようにな」

「もちろん」

小太刀を納めて急いで魔力反応のある場所に駆けていった

背後では美由希ちゃんが反省をして恭也と一緒に鍛錬を再開していた
もっ少し警戒心を高めてもらいたいんだけど・・・

上空200メートルあたりを飛行魔法で飛び、向かうと道路がひど
い有様になっていた。

その原因は夢に出てきた塊となのはとフェレットだった

なのははフェレットから渡された赤い石を持ち目を閉じ呪文を唱える

・・・なつてない

眼前に敵がいるときに目を閉じて集中するなんて自殺行為だわ

「（ミラル、幻術で変装しつつ急降下。しばらく時間を稼ぐわよ）」

「（承りました）」

なのはを襲おうとしている塊の正面に立ち、一蹴

たいしたダメージが通るわけないけど、意識をこちらに向け行動を
阻害することは成功した

「なつてないわ。意識の外に敵を出すなんて、闘う者として決して
やってはいけないことよ」

「あ、あのあなたは！」

なのはは、私に聞いてくる

幻術のおかげで私は銀髪で声も少し低くなっているから他人だと思
っても仕方ない

「そんなことはどうでもいいでしょう！それよりその小動物！」

「は、はい！」

「さっさと解決する術を使いなさい！私が時間だけは稼いであげるから安心して」

塊の攻撃を避けつつ蹴りで注意を引き付ける

しばらくしてなのはを桜色の魔力光が包み、消えたときには聖祥の制服に似たバリアジャケットを着た状態でなのはが戸惑っていた

「よし、それじゃあ頑張りなさい。焦らなければこの程度楽勝だから」

それだけ言ってさっさと離脱

する振りをしてオプティックハイドで隠れながら近くで見守ることにした

「なんだっ たんだろうあの人・・・ってそうだった」

また意識の外に出した

忠告の意味はなかったのだろうか

そのまま非フェレットはなのはに説明をし、なのははそれを実行する

一度だけ危うくなったもののバリアで防ぐことでなんとか凌ぎ、黒い塊の核だったジュエルシードを封印した

見てた感想は、運が良かっただけ

本能に従った攻撃をされただけなのと、弾かれた事を警戒してくれ
たという幸運

相手がこちら側の人間なら、意識から外された瞬間に命を奪うだろう
だからと言って私は何かをする訳じゃない

手を出すのは命の危険に曝されたとき

つと、いつの間にかなのはたちがいなくなっていた

追いかけるのも面倒なので、家に帰るのことにしよう

ふと、さっきまで居た場所をみる

・・・事故現場より悲惨な状態ね

私が家に真っ直ぐ帰ってから数分後になのはがこっそりと帰ってくる

本人は気づかれないようにしているみたいだけど御神の剣士である

私たちには意味がない

恭也と美由希ちゃんが迎えに行ったけど、気配を消して行かなくて
も……

暫くして三人が戻ってくる

そしてなのはの腕の中にはあの似非フェレットがいた

改めて見るけど、やっぱりフェレットとは違う

「昔の人はイタチを食べてたみたいだけど、どんな味だったんだろう」

そう、小さく呟いてみる

騒がしいのでバレないと思ったけど、しっかり聞こえてたみたいで
静まり返った

「……明日の朝食はイタチ肉の入った味噌汁ね」

「ユーノくんを食べちゃだめだよ!」

「誰もフェレットを食べるなんて言っていないわよ。ただイタチ肉が
食べたくなっただけで……」

「な、なのは!明日も学校なんだから、早く寝なさい!」

「う、うん！おやすみなさい！！」

なのはが似非フェレットを連れて二階に上がってしまった

「……厄介事は御神の業なのかな」

今までの冗談を流し、ため息をつく

もちろん士郎たちも真面目な態度をとっている

「あの似非フェレット、間違いなく魔法のある世界から来たわ」

「そうか……いったい何のために来たんだ？」

「ジュエルシードって危険物を回収しに来た可能性が、今のところ最有力かな。言い方は悪いけど、なのはの魔力に目を付けて利用してる」

「「そうか……」」

間違った表現ではないつもりだったけど、親バカとシスコンの二人を刺激するには十分だったみたい

表情が消え体から滲み出す殺気を押さえることなく席から立ち上がった

だけど

「士郎さん、妙なことをしたら口も聞きませんよ？恭也も、生クリームたっぷりのシフォンケーキを毎日食べたいの？」

「……っ!!」

桃子さんの言葉で撃沈

やはり母は強し、ということなのだろう

悔しがる士郎たちの様子にため息をついた桃子さんはこっちをみる

「千秋も、二人を刺激しないようにね」

「的を外した表現はしてないつもりだけどね。気をつけるよ」

「お願いよ。」

それで千秋はどうするつもりなの」

「……特に何もしない。」

なのはは上手く甘えることができないみたいだし。今まで甘えることが出来るようにしてきたけど、どうも意固地になって自分で解決しようとしてる。

このままだと抱えれない荷物を担いで、いつか潰れる。だからいつそのことそれを一切しないことにしてみる」

「それってなのは大丈夫なの？昔の恭ちゃんみたいにならないかな」

「さあ？その可能性もないとは言えないけど、いま思いつく唯一の手段がコレしかないから。だからやるしかない」

言い分が通ったみたいで、桃子さんたちは何も言わなくなった
逆にその隣にいた士郎は何かを決心した顔でこちらをみる

「なあ、頼めるか親父」

「……わかってる。なのはを死なないようにするつもりだ」

そこまで行くのなら俺は観客から役者に回ろう

「大体、見捨てる訳がないだろ。なのはは俺の孫であり、妹なんだから」

「ならいいんだ。さあ、俺たちももう寝よう」

士郎の一言でこの場はお開きとなった

自分で言っておいてなんだけど、なのはのことを孫として見れてないような気がするわね

自室に戻りつつそんなことを考えていた

翌日

なのはと似非フェレット（ユーノという名称だったか）の念話を傍受し事の始まりを聞いていたけど

似非フェレットのせいではないでしょうに

私を含めて、ガキらしくないガキのまわりには同じくガキらしくないのが集まるのね

アリスはともかく、すずかもそうだし

似非フェレットは万全になったら自力で捜すと言っただけなのはは自分も探すと言い張った

なのはの意見は正しい

あの子は全く違うだろうけど、私からすれば訳の分からない生命体

に命を預けられるわけがない

それに気づいてる可能性は低いけど

と、念話を聞いていたらいつの間にか放課後になってしまった

「（ミラル、フェイトの母親は見つかったかしら）」

「（はい。名はプレシア・テストロッサ。過去に研究の失敗で娘をなくした方です。裁判終了後に姿を消したと公式記録には記されていますが）」

「（どこかの組織と繋がっていたのかしら）」

「（ただの裏組織なら良かったのですが……
相手は時空管理局のトップ、最高評議会です。どうやら人造人間の作成を依頼したようです）」

「（どこの世界にも、腐った組織はあるものね）」

いつの間にか間違った形になった癌細胞

それが正しい表現かな

「（それじゃあ行くわよ。しっかりと変装してね）」

「（主の意のままに）」

私たちはフェイトの母親に会いに行った

会話をしている数時間で、またジュエルシードが覚醒したなんて思
いもしなかったわ

お知らせ？アンケート？（前書き）

よろしくお願いします

お知らせ？アンケート？

どうも、天狐です。

黒き舞姫を読んでいただきありがとうございます。

最近になって感想が制限付きだったことに気がつき、制限をなくしました。

今まで感想を書こうとしてくれた方、申し訳ありませんでした。

こんな天狐でも感想を書いていただけるのなら嬉しいです。

とりあえず、お知らせは以上です。

次にアンケートっす。

A's編に入ったときに、オリキャラの由里香と、新たなオリキャラが参戦します。

しかし、今のままだと由里香はまともに闘えません。さらにオリキャラは設定が出来ていても、名字しか決まっておらず名前がありません。

なので、皆さんにお願いしたいのは以下のことです

1・由里香はどうやって強くなってほしいか

・ROの世界にトリップ！

・ブレイブルーの世界にトリップ！

・千秋の夢に出てきた男にレアスキルの使い方と闘い方を習う

・その他

2・新キャラの名前（設定は次の通り）

千秋と同年齢の金髪で赤い瞳の少年

中性顔でよく性別を間違われるが、本人は気にしていない

料理ははやてよりもうまく、お菓子づくりは桃子に認められるくらい

名字は『藤枝』

戦闘スタイルは高速戦闘を主軸とするオールラウンダー

この二つです。

特に由里香の方は由里香自身の戦闘スタイルが変化するためお願いします。

どちらか一つでも構いませんのでお願いします。

期限はプレシア戦が始まるまでとします。

第5話（前書き）

遅れてすいませんでした。

必死に考えているうちにほかの案が浮かんできて悪の娘のSS（小説版終了後の再構成もの。リン、レンと名乗って活躍する話）やらFateとSHUFFLE！とのクロスもの（Fate世界の土見氏が第5次聖杯戦争終了後SHUFFLE！の方の人間界に現る話）やらいろいろと書きそうになってこらえてたらこんなことに…

今後はもう少し字数を減らして更新速度を上げようと思います

第5話

プレシア・テストロッサのいる場所に転移した私はすぐに警戒態勢に入ったけど、静けさを保ったままだ

これは怪しいけれど、堂々と進むとしよう

ちなみに幻術を使った変装は転移前に終わらせてある

前とは異なり、今回はコスプレ『あかいあくま』仕様らしい

なぜ「らしい」とつけるのは、ミラル任せだからだ

なぜか優雅に振る舞わなくてはいけない気がする

まあ、無視しよう

しばらく進み、何も起こる気配もないまま最下層に行き着いた

何かあると思ったけど、変わったものどころか人の姿もない

「留守か……」

仕方がないわね。日を改めて来ましょう」

「その必要はないわ」

独り言に返答があり、声の主の方を向く――

つもりだったけど直感的にその場から飛び退く

するとさっきいた場所を魔法が通り抜けた

そしてそれを放ったのは声の主であろう、女性だった

「随分な挨拶ね。尤も、倒すつもりはなかったみたいだけど」

「ええ。けれど、あれを楽に回避する不審者には相応の対処だと思うのだけど？」

それもそうね

砲撃を放った女性は警戒態勢をとって対峙しているけど、何か違和感を感じる

どうして違和感を感じるのかは知らないが、さっさと用件を済ませてしまおう

「私は争いにきた訳じゃないわ。ただ聞きたいことがあったから出向いただけ」

「信じると思っの？」

「武装といえるようなものは一切装着してないっただけじゃ信頼は出来ないと言うのね。なら警戒したまま聞いてくださいな」

私は最小限に身構える

さて、この人は何を考えてるのかしら

「まずは、あなたは何を願うの」

「あなたに言う必要はないわ」

「そう……あんな石に願うくらいだから無茶なことだとは思っけどね。伝説の都とか、死者を生き返らせるとか、不治の病を治すとかね」

私が言ったことに、微かに反応するプレシア

ということとは、どれかを願っているか、意見が興味深かったか

「まあいいわ。次の質問をするわ。

あなたは何のためにそれを願うの？」

「どっということかしら？」

「そのままよ。どうしてそれを願うのか、ただそう聞いてるだけ」

「……娘の為よ」

そう

それがあなたの答えか、プレシア

「どうやら私たちは相性が悪いわね。協力できそうにないわ」

「こちらは協力なんて必要としてないけど、理由を聞かせて貰えるかしら？」

「いいわよ。」

まず、私はあんなものに頼らない。願いが何であろうと、私は自分で叶える。勿論頼るべきなら頼るけど、それは物じゃなく人を選ぶもの。

次に、意識の違い。誰かを助けたい。誰かを手伝いたい。そう思うのは私なんだから、結局私は私の為にそれを行う。あなたとは異なる思想」

「そう。よくわかったわ」

「それじゃあ帰らせてもらうつわ。ここはイヤなことを思い出しそうになるし」

ミラルが転移の準備をしていたので、そろそろ帰れるはずだ

そう思ってたらずでに転移準備が終わったらしいので、この言葉で

も吐き捨てておこう

「過去は変えれないし、死者は蘇らない。そんなことは願っちゃいけない。だって今まで犠牲にした全てが、無かったことになってしまっから」

「っ！」

「サヨウナラ。いつかあなたが捨てるものを聞きに行くわ」

それで転移したけど、直前に見えたプレシアの顔は迷いと後悔があった

「ただいま」

我が家に帰って見たものはいつも異常に疲れてる様子の妹

心配したかったが、夕飯の食材をダメにしたくなかったのでスルー

そのまま台所で夕飯の支度をする

完成間近になるころに美由希ちゃんが台所にやってきた

「そろそろできるよね？手伝いに来たよ」

「ん。それじゃあお皿を出して」

「盛り付けも手伝おうか？」

その申し出はうれしいけど

ねえ……

「残念だけど、兄さんから『料理に一切触るな』って言われたの忘れたの？意味ないよね。言ってもすぐに忘れてたら。もしこのことがばれたら額に全力の一撃をもらう事になるよ？」

徹とおしを使った頭部への一撃

普通なら脳へのダメージがありすぎて生きてはいない

でも恭也は何故か制裁に関する技術が巧く大したダメージを与えない才能のない私ではできない行動なので羨ましかったりする

まあ、やられる美由希ちゃんは頭を抱えるほどいやみたいだけどね

「笑わないでよ・・・アレかなり効くんだよ」

「効かなかつたら罰じゃないからね。やられたくないんだつたらおとなしくした方がいいと思うよ」

「そうするよ……」

素直に聞いてくれたか……

もしもの世界があつたとしても美由希ちゃんの料理の腕がまとも以上な世界があるきがしない

「（主、正史^{アニメ}ではまともに料理を作れるみたいですよ）」

「（電波を受信した上、急に発言しないで。軽く驚いたわ）」

「（主、私はデバイスで機械です。電波であれば神の声であろうと受信しましょう）」

すこいわね

というかそんな機能持たせたつもりはないけど

「（主のためならこの程度己で身につけます。お望みならば天空竜

でも巨神兵でも翼神竜でも天元すら突破するようなロボットでも召還してみましよう」

「うん。従えることできなさそうだから遠慮しておくわ」

「（ならばマジックガンナーでも）」

「（お願いだからやめて。というかさっきから破壊にしか使えない危険な例しか出てきてないから。せめて盾に使えるのを例に挙げなさい）」

「（わかりました。では不死の権利を得た半神半人の狂戦士と縁で髭を生やしたスライムの二択になりますか）」

「（前半はわからないけど、後半はわかった。たしかに速くて硬い、けど脆いから）」

「っていつまでこれをやらなくちゃいけないの？」

「（ミラル、用件があるなら早く言いなさい）」

「（妹君が二個目の回収を終えていたようです。恐らくは私たちがプレシア女史と会話をしている間かと）」

「（そこしかないでしょう。同じ世界に在る限り反応を逃さないのは知ってるし）」

しかし、連日いやほぼ同日に覚醒するなんてね

「（ミラル）」

「（日付変更までには完成できるでしょう）」

「（そう。そのまま進めて）」

ミラルとの会話を止める

これ以上念話をしていたら似非フェレットが感づくかもしれないからだ

料理も運び終え兄妹全員で食事を済ませた

両親はまだ翠屋にいるためこの場にはいなかった

そこそこ好評だったのはイタチ汁

初めは豚汁だと思われてたので訂正したらなのはと、偶々この場にいた似非フェレットのサバイバル未経験組は固まり、のこりの経験組は味の評価をしていた

片付け終えて自室に戻ろうとしたときにはなのはが似非フェレットを連れて外出しようとしていた

「なのは、どこに行くつもり？」

も！）」

「（落ち着いて。千秋さんから魔力は感じ取れないから魔法関係に気づいてる可能性はないよ）」

「（でも、今日のジュエルシードよりも速く動けて、誰がどこにいるかわかる御神の剣士だよ！？）」

「（なのは、落ち着いてってば）」

念話を傍受してみれば、ヒドい言い様ね

別に御神の剣士だからできる訳じゃないんだけど

「なのは、失礼なこと考えなかった？」

「な、なんでもないよ！それで千秋お姉ちゃん、お話って？」

焦りすぎて返答がおかしいし、話の逸らし方も変

だけど乗っておこう

「最近、私たちに隠し事してない？」

「えー！？してないけど……」

眼を泳がしながら否定したなのは見てため息をついてしまう

「言いたくないなら、言わなくてもかまわないけど。でも、困ったときは必ず誰かに手伝ってもらうこと。人間は一人じゃ苦しいことや出来ないことが多いのは当たり前。なら他の人に手伝ってもらったり任せなさい」

努力するのはいいことでも度が過ぎれば無理無茶無謀と変わらない
昔の恭也がそうだったように、ね

「……ん？」

「（なのは、ジュエルシードが覚醒したみたいだ！）」

似非フェレットと同時に気づいた

気付いてしまったからには、行くしかないか

「なのは、先に帰ってなさい」

「え！？」

返答を待たずに私は疾走する

向かうのは山の中

「主、完成はしていますが」

「どうせなのはたちが来るからいいわ。それより伏龍と鳳雛を」

「了解」

転送されてきた愛刀を受け取り伏龍を右肩から、鳳雛を左腰からそれぞれ抜けるように身に付ける

山に入って直ぐにジュエルシードは見つけた

前方には人並みの高さを持つケモノ

眼が大量にあって体毛らしきものは赤黒く蠢いている

「どうみても」

「祟り神にしか見えませんね」

アレと同じように触れたら呪われる可能性が

「人の思念が入り込んではいないようです。その可能性はあっても1か2くらいかと」

「そう。なら少し牽制して、それからね」

鳳雛だけ抜刀し一歩近づく、ケモノは私に気付く

更に二歩、ケモノは殺気立つ

三歩、堪えきれなかったらしく体毛をこちらに伸ばす

それを避けて斬り飛ばすとすぐに離脱

切り離された体毛は地面に落ちてトカゲの尻尾のように動く

「……大丈夫、か。なのはたちが着たら教えて」

「了解しました」

ケモノに向かい走る

ケモノの迎撃を避け斬るが体毛と皮を浅く裂いた感触のみが手に伝わる

体毛が鐔に触れそうになるまで深く斬ったけど予想以上に体毛が厚かった

「（体毛自体に熱源感知。切り離されたものでも70を超えています）」

そう、か

私は覚悟を決める

伏龍も抜刀し自然体で集中していく

知っている魔力を感知したけど無視

ケモノが猛スピードで突進してくるのを感知し、私の間合いに入る瞬間、世界がモノクロになる

音のない世界をゆっくりと向かってくるケモノから逃げるために泥のように纏わりつく空気を掻き分けて右側に移動する

そして鳳雛で脚を切り落として狙いを定めた伏龍で射抜いた

そこまでで色彩が戻る

「……………」

伏龍は狙い通りケモノの心臓を貫いていた

体毛の中に入れた腕を引き抜き納刀する

火傷を負った腕を気にする前に、私はなのはたちを見る

「先に帰るように言ったのに」

見せなくなかったけど見られたなら仕方がない

「なのは、今から埋めるための穴を掘るから待ってて」

なのはの側を過ぎて拓けた場所を探しに向かった

「っ、お姉ちゃん！」

「あなたにはやるべきことがあるでしょう。ならさきにそれをすませなさい。言いたいことはその後だね」

振り返らないでそれだけ伝えて歩を進める

なのはに伝えるしかないかな……

穴を掘り終えて戻るとジュエルシードを封印したようで、ケモノはイノシシになっていた

そこまで一緒なのかと思いつつ、イノシシを埋めて手を合わせた

そして現在帰宅中

誰もいない道を二人で静かに歩く

なのは口に出せずにチラチラとこちらを伺っていた

仕方がない

「聞きたいことが有るんでしょう」

「うん……」

お姉ちゃん、どうして？」

どうして、ねえ……」

「御神だから、って言っても分からないよね。私たちは護るために剣を振ってる。できるなら相手も救いたい。でも力量が足りないのにそれを行おうとすればこちらが危ない。仕方がないから殺すこともある。殺さない方法があるかもしれない。でもすぐに思いつかず自分が安全になってから考えていたら、その間に誰かが傷つく。私はそれを黙ってみてることになる。それが嫌だから、私はその場での最善を尽くすの。それが命を奪うことだとしても、わたしは覚悟して行っ」

ましてや私は不破。『危険が及ぶ前にそれを取り除く』ことを要とした剣士なのだから

そんなことを言っても、なのはにはわからないだろうし、わかってほしくもない

「なのは、奪いたくないなら『強さ』を得なさい。奪うことしかできない『力』じゃなくて、敵も味方も守って最高のハッピーエンドを作れるだけの『強さ』をね」

なんとなく、なのはもこちらに近い道を歩んでいくのだろうと直感した

私はなのはよりも少し先を進み、空を見上げる

そこは冬の夜空のように綺麗な星々があつた

ふと朋友たちを思い出し、彼女たちに願う

願わくばなのはやフェイトが私たちのような血濡れの道じゃなく、
太陽が照らした明るい道を歩ませてほしい、と

「ぼーっとしてるとおいでくよ?」

「にゃ!?!ま、待ってよ!?!」

第5話（後書き）

次回はフェイトちゃん登場の巨大猫編！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7632j/>

黒き舞姫

2011年4月17日22時29分発行